

Toshihiro Wada

*Invariable Concomitance in Navya-nyāya*

山本和彦

本書（邦題『新論理学における遍充』）は名古屋大学助教授和田壽弘氏のプーナ大学（University of Poona）への学位請求論文である。和田氏は新論理学（Navyanyāya）の最も重要な概念である遍充（vyāpti）の研究を一九八四年から一九八六年の二年間にわたりプーナ大学サントリット高等研究所（Centre of Advanced Study in Sanskrit）において同研究所の所長である Prof. V. N. Jha の指導のもとで行われた。そしてその成果として一九八六年に *The Concept of Invariable Concomitance in Navya-nyāya*（新論理学における遍充概念）というタイトルでプーナ大学に提出され、一九八八年に Ph. D. の学位を授与された。

本書の価値ある特徴は、ふたつある。ひとつは、本書の大部分を占めるガンデーシャ・ウバーディヤヤー（Gaṅgeśa Upādhyāya, ca. AD 1325）の『タットヴァアチンターマニ』（*Tattvachintāmanī*）とその註釈であるラグナータ・シローマニ（Raghunātha Sīromāṇi, ca. AD 1475-1550）の『タットヴァアチンターマニディーディティ』（*Tattvachintāmanīdīpiti*）の遍充（vyāpti）の「究極的定義」（*Siddhāntalākṣaṇa*）章に対する解

読研究である。従来の新論理学の研究といえば、新論理学の専門用語の説明に留まることが多く、本格的なテキスト解読の研究にまでは到らなかった。遍充についての研究は本書の序論（pp. 5-8）に詳述された（pp. 14-17）Sailesvar Sen の研究（*A Study of Mathurānāth's Tattvachintāmanī Rahasya*, Wagingen, 1924）を始めたといふ数多くある。ラグナータの「究極的定義」章については Erich Frauwallner による独語訳（“Raghunātha Sīromāṇi”, *WZKS* 10, 11, 14, 1966, 1967, 1970）と Kamaleswar Bhattacharya による仏語訳（“Le Siddhāntalākṣaṇapraharāṇa du Tattvachintāmanī de Gaṅgeśa avec la Dīpiti de Raghunātha Sīromāṇi et la Tika de Jagadīśa Tarkālaṅkāra”, *Journal Asiatique* 285, 286, 288, 270, 272, 1977, 1978, 1980, 1982, 1984）があるが、いずれもその現代語訳からだけでは読者が遍充関係の構造を十分につかめるには言い難い。新論理学派の伝統は現在でもインドで続いており、ジャガディーシヤ（Jagadīśa, ca. AD 1550-1610）やガダーラ（Gadādhara, ca. AD 1605-1709）といふラグナータ以降の新論理学者の著作に対して、註釈が施され、かつ出版されている。しかし、それらを参照して新論理学を理解することは、一般人にとってほとんど不可能である。したがって、「究極的定義」に関して本格的な解読研究は、いままでほとんどなかったと言わざるを得ない。しかし、本書では、新論理学のみならず、古典論理学の時代から学派を問わず、常にその定義づけに最大の関心が払われた遍充（vyāpti）のガンデーシャ

とラグナータの「究極的定義」章すべてに対して現代語(英語)訳が与えられ、そして、非常に詳細な解説がなされている。本書の解説研究によって新論理学派の論理学者たちにもっとも影響を与えたミティラー(Mitchila)派のガンゲージヤとベンガル(Bengal)派を代表するラグナータの遍充の究極的定義の全容が明らかにされている。このことは、新論理学研究史上において、画期的な業績であり、新論理学を研究する者にとって、まさに待望の本格的な研究書である。

ふたつめの特徴は、本書の随所で用いられている図(Figure)である。新論理学の研究は、独特の専門用語と長大な複合語解の難解さのために現代語に訳出することが非常に困難であり、それゆえ西洋論理学の記号を当てはめる試みが以前からなされてきたが、インドで生まれた新論理学を西洋の論理学の概念に当てはめることには無理があり、記号を用いる方法にはおのずと限界がある。しかし、本書では各概念の限定関係や制限関係などの一連の関係を図で示し読者が視覚的に理解できるように配慮されている。新論理学の概念の影しい関係を理解するにはこの方法は初心者のみならず新論理学の研究者にとっても非常に効果的である。この図に関する歴史については、和田氏によって、すでに述べられている(「インド哲学については、和田氏によって、すでに述べられている」(「インド哲学における世界構造とその図式化」—立川武蔵著『はじめてのインド哲学』の書評にかえて—『中外日報』一九九三年四月二日。この書評は加筆され、『東海仏教』第三十八号、一九九三に転載された)が、こゝでも和田氏のことを借りて簡単に紹介することにする。イン

ド実在論の世界構造を図式化して説明しようという試みは、出版されたものとしては、Goekoop, C. の *The Logic of Invariable Concomitance in the Tatvachintamani* (Dordrecht, 1967) が、最初である。しかし、彼の方法は、その後、受け継がれることはなかった。日本では北川秀則博士によって図式化が始められ、名古屋大学でのインド哲学の講義のなかでの伝統として立川武蔵氏、宮坂有洪氏、そして、和田氏へと引き継がれてきたものである。北川氏が図を用い出した理由は、おそらく授業で学生が複雑なインド実在論の構造を理解し易いように、との配慮から生まれたものだと思う。したがって、視覚的に概念間の構造をとらえることが目的であり、図を組織的、体系的に構築するという試みはまだなかった。しかし、それらの伝統が引き継がれるに従って、単に初心者に提示することだけにとどまらず、図を厳密に規定して学術的な使用に耐えられるものとして、再構築されたものが和田氏の図である。和田氏の図は、既存のものに比べ曖昧さが排除され、各限定・制限関係について明確に表記の記号が使い分けられ、大幅に改良が加えられている。和田氏のこのような厳密な図は、もはや視覚に訴えるためだけの単なる絵にとどまるものではなく、記号論理学の記号の図式化であると考えられる。図の効用について一例だけ挙げておくことにする。古典論理学でのサンスクリット語での、*bhūtaḥ ghaṭo 'sti*。(地面に瓶がある)という表現を新論理学では、*bhūtalaniṣṭhabhūtalataṭvāvacchinnaḥaratamirupitaghataṇiṣṭhaghataṭvāvacchinnaḥayatāvan ghaṭah*。(地面に存在する

地面性に制限される保持者性が表述する、瓶に存在する瓶性に制限される被表述者性、を瓶は持っている」と表現する。原語のサンスクリット語からは、何が何に存在するのか、何が何を制限・限定するのか、何が何に制限・限定されるのか、といったような各概念が指示する方向性が理解しにくい。日本語に置き換えてもことばの係り方が曖昧であり、厳密な論理思考には耐え難いのである。しかし、図式化すれば、何が何に存在するのかという点は、図中で上にあるものが基体中存在するもので、下にあるものが存在の基体であるとともに理解できる。そして、限定・被限定関係、制限・被制限関係は、限定・制限する側から限定・制限される側に矢印が向かっているので、方向性もまたすぐに理解できる。和田氏はひとつひとつのサンスクリットの用語と図中で使われる記号との対応関係を厳密に定義されているので、読者が関係の方向性を知る上での疑問は氷解し、各概念間の対応関係を明確に理解することができるのである。このような図を導入することによって、新論理学の専門家以外でも新論理学のテキストの理解が容易になる。しかもその図は学術的な使用にも十分耐えられる厳密さを備えている。本書は以上のような意味でも、新論理学研究史上、図を本格的に導入したものと先駆的な価値を持つものである。

本書の目次を和訳で示すと次のようになる。

緒言  
目次

序文

略号

第一部 新論理学と遍充の基本的概念

1 序論

2 新論理学の歴史上のガンゲーシャとラグナータの重要性

A 論理学派の歴史

B ガンゲーシャとラグナータ

i ガンゲーシャ

ii ラグナータ

3 「遍充」章における基本的概念

A 推理知 (anumiti) と因 (hetu)

B 限定者 (vishesana)

C 表述者 (nirupaka)

D 制限者 (avacchedaka)

E 定義 (lakṣana)

4 ガンゲーシャ以前の遍充の概念

5 ガンゲーシャとラグナータの「究極的定義」章での論争点

6 ガンゲーシャとラグナータの遍充定義の結論

A ガンゲーシャの定義

B ラグナータの定義

C 結論

第二部 ガンゲーシャとラグナータの「究極的定義」章

サンスクリット・テキスト、英訳、解説

参考文献

# I 第一次資料

## II 第二次資料

### 索引

本書の構成は二部からなる。第一部は Prof. V. N. Jha による緒言に始まり、第一章序論では、新論理学の遍充の研究史が述べられている。そのなかで、Erich Frauwallner (1966, 1967, 1970) の研究は、ガンゲーシヤからラグナータまでの遍充を歴史的に追求した唯一のものであり、新論理学研究のなかで最も遅れている歴史的側面からのアプローチがなされた重要な論文である。

第二章では、ガンゲーシヤとラグナータの新論理学史上の重要性が述べられている。ガンゲーシヤは *Tattvachintamani* の各章を知覚 (Pratyakṣa)、『推理 (anumāna)』類推 (upamāna)、『言語 (śabda)』の四つに大きく分け、古典論理学では認識対象 (prameya) の考察が中心であったのに対して、認識手段 (pramāna) を考察の中心にした。彼はウダヤナ (Udayana, ca. AD 1025-1100) によって始められ、シャシャダラ (Śaśadhara, ca. AD 1200)、『ヒニカンタ (Manikāṅṭha Mītra, ca. AD 1300)』によって確立された新論理学をさらに厳密に考察し、関係を表す新しい用語を用いて古典論理学への曖昧さを排除しようとした。それらの用語は、『反存在 (pratyogin)』、『共通の基体を持つもの (samānādhikarāna)』、『制限者 (avacchedaka)』、『被制限者 (avacchinna)』、『共存関係 (samānyādhikarānya)』など、あ

り、これらの概念の導入に伴って、サンスクリット語自体も格関係を伴わずにコンパウンドによって連続する形になった。ガンゲーシヤのこのような用語、考え方や表現方法は、ウダヤナによって始められたものである。そして、ガンゲーシヤ以降のサンスクリット語は、哲学の分野に留まらず法律や文学の分野にまでこの新論理学の表現方法で表現されるようになった。ガンゲーシヤが後世に与えた影響には計り知れないものがある。

ラグナータ・シローマニは、ヴァースデーヴァ・サルルヴァバウワ (Vasudeva Sarvabhaṇṇa, ca. AD 1450-1540) に次いでベンガル (Bengal) 派最初期にガンゲーシヤの『タットヴァチンターマニ』に『タットヴァチンターマニデーティ』(Tattvachintamanīdīpī) という註釈を著した論理学者である。ラグナータ以前における新論理学者たちは『タットヴァチンターマニ』に直接註釈を施していたが、ラグナータが『タットヴァチンターマニデーティ』を著してからは『タットヴァチンターマニ』に直接註釈を著す論理学者は稀になり、ジャガディーシヤやガダーダラなどのように、ラグナータの『タットヴァチンターマニデーティ』に対して註釈を施すことが主流になった。ラグナータは、彼以降のベンガル派の新論理学者たちに対して絶大な影響を与えている。彼は、その他、様々な著作を残しているが、そのなかでも *Padārthahatyanirūpana* というヴァイシエシカ (Vaiśeṣika) の範疇論に関する書物を著した哲学者としても非常に評価されなければならない。その最大の特徴は、『非存在 (abhava)』に関する独自性である。

例をひとつあげれば、あるものXの非存在はXと同一ではない、という考え方である。

第三章は、推理知 (anumiti) / 因 (hetu) / 限定者 (viśeṣana) / 表述者 (anirūpaka) / 制限者 (avaśchedaka) / 定義 (lakṣaṇa) という新論理学の基本用語の解説から構成されている。新論理学は、関係の論理学とも言われる。それらは、限定・被限定関係 (viśeṣyaviśeṣanabhāva) であり、表述・被表述関係 (anirūpy-anirūpakabhāva) であり、制限・被制限関係 (avaśchināvaśchedakabhāva) である。新論理学の教ある専門用語のうち、制限者 (avaśchedaka) と反存在 (pratyogin) とのふたつは、いかなるラーマのなかにも頻出する用語であるので、簡単に説明しておく。avaśchedaka は、avaśchima と対概念になるもの<sup>1)</sup>、同一基体間の制限者であり、avaśchima を制限する属性 (dharma) と関係 (sambandha) との用法があるが、新論理学文献で頻出する用法は制限する属性である。この意味での avaśchedaka を「山は火を持つ。煙のゆえに」(parrato vahnivān dhūmāt) という例では、山が主題であることを示すために「山性は主題性の制限者である」(parratavāni pakṣatāvaśchedakam) と表現する。同様に、火が所証であることを「火性は所証性の制限者である」(vahnivān sādhyatāvaśchedakam) / 煙が能証であることを「煙性は能証性の制限者である」(dhumatvam sādhanatāvaśchedakam) と表現する。pratyogin は、anuyogin と対概念になる用語で、大別して三種の意味がある。第一に、「地面は瓶の非存在を持つ」という場合、地面が

anuyogin 瓶が pratyogin である。この場合、瓶は、瓶の非存在の pratyogin と表現される。第二に、「兎は月の類似性を持つ」という場合、兎が anuyogin / 月が pratyogin である。

この場合、月は、兎の類似性の pratyogin と表現される。第三に、「地面は瓶の結合関係を持つ」という場合、地面が anuyogin / 瓶が pratyogin である。瓶は、地面の結合関係の pratyogin と表現される。以上三種のうち、頻繁に用いられる用法は第一番めの存在に対する非存在としての pratyogin である。この用法で用いられる pratyogin を和田氏は、「反存在」と和訳されている。(和田壽弘「インド新論理学派における制限者 avaśchedaka」(1)『東海仏教』34、一九八九。和田壽弘「インド新論理学派における制限者 (avaśchedaka) (2)」『名古屋大学文学部研究論集』105、哲学35、一九八九。)

第四章では、ガンゲーシャ以前の新論理学者であるシャシャダラ (Śaśadhara, ca. AD 1200) の述べる遍充が研究されている。シャシャダラは『ニヤーヤンタラディーパ』(Nyāyāsiddhāntadīpa) のなかで、シャシャダラ以前の論理学者の十七種類の定義を述べる。これらの定義は、『マニカント・ミシハラ (Mañikanṭha Mīra, ca. AD 1300) が『ニヤーヤラタナ』(Nyāyavārtā: NR) で言及する定義とガンゲーシャが『タターヴァンターニ』(TC) で言及する定義と重なるものもある。以下が、シャシャダラが述べる十七種類の遍充定義である。

(1) 遍充は添性を持たない関係である。(anaupādhikatva;

Udayana) = NR 10, TC 12.

(2) 遍充は本質的關係である。(svabhavikatva; Trilocana)

= NR 4, TC 18.

(3) 遍充は逸脱しながら關係である。(avyabhicāritatva; Śrīd-hara)

(4) 遍充は全体による關係である。(kārttyena sambandha; Vallabha) = TC 14.

(5) 遍充は能証と共通な場所を持つすべしへの属性と共通な場所を持つ所証〔と能証と〕の共存關係である。(sādhana-samādhi-kāraṇyāvaddharmasamādhikāraṇasādhyasamādhikāraṇya) = TC 17.

(6) 遍充は被限定者に対する限定者の關係である。(viśiṣṭa-vaśiṣṭya) = NR 7.

(7) 遍充は同一關係である。(tādātmya; Dharmakīrti) = NR 6.

(8) 遍充は因果關係である。(kāryakāraṇabhāva; Dharmakīrti)

(9) 遍充は所証なしでは能証が生じない關係である。(avin-abhāva; Dignāga, Prasastapada) = NR 3, TC 19.

(10) 遍充は動力因に対する結果の關係である。(nimittanai-mittikatva; Saṃkhyā)

(11) 遍充は特殊な交互無である。(anyonyābhāvaviśeṣa)

(12) 遍充はすべしへの所証の能遍である所遍性である。(yāvatsādhyavyāpakavyāpyatva)

(13) 遍充は所証の能遍である所遍性である。(sādhyavyāpa-

kavyāpyatva)

(14) 遍充は能証の恒常無との共存關係に遍充される恒常無の反存在である所証〔と能証と〕の共存關係である。(sādhanātyantābhāvasamādhikāraṇavyāpyātyantābhāvapratyogisādhyasamādhikāraṇya)

(15) 遍充は所証の非存在の能遍である非存在の反存在である能証との共存關係である。(sādhyābhāvavyāpakabhāvapratyogisādhana-samādhikāraṇya)

(16) 遍充は關係のみである。(sambandhamātra) = NR 1, TC 20.

(17) 遍充は、普遍のように、他の属性に依存しない属性である。(jātivad dharmāntaraghatitasartrah, Seṣanata no. 註による。シャシャタラは anyat としか述べていない)

古典論理学での遍充定義は、ダルムキールティの定義 (tādātmya) に代表されるように、遍充とはどういふ關係 (sambandha) なのかということが問題にされていた。しかし、新論理学の時代になり、ガンゲーシャの定義によって遍充の概念は能遍・所遍間の時間的・空間的・量的な關係の問題まで考慮されるようになり、さらにラグナータはあらゆる曖昧さを排除し、古典論理学での定義とは比較にならないほど複雑な定義になった。

第二部はガンゲーシャの『タットヴァチンターマニ』とラグナータの『タットヴァチンターマニデーティ』の遍充 (vyapti) の「究極的定義」(Siddhantatalsnya) 章の解説研究

である。テキスト校訂と英訳のための定本は、*Gaḍādhari* (Varanasi, 1913-27) であり、E. Frauwallner, E. (1966, 1967, 1970), *Anumana Dīkṣi Prastāvirī* (Calcutta, 1911), *Tat-tvachintāmanidīkṣiprakāśa* (Calcutta, 1910-12), *Jāgadisī* (Banaras, 1933, 1935) が参照されべき。ラグナータに年代が近いクリシュナダーサ・サールヴァム、ウイ (Kṛṣṇadāsa Sārvaḥma, ca. AD 1500-60) と、ヴァーナムダ・シヤダーンタヴァーギーシヤ (Bhavananda Siddhāntavāgīśa, ca. AD 1520-80) の註釈書がまず参照されるべきであるのだが、シヤガディーシヤやガダーダラという註釈者たちはラグナータ以降に発展した議論を懸命に論じており、しかも註釈者自身の思想がかなり入り込んでいるという理由からラグナータ自身の思想を抽出することは困難である。それよりも、*Jāgadisī* テキスト中に含まれている *Vāmacarāna Bhattacharya* の *Jāgadisī* 註に対する註釈 (*Tīrthī*) は、『タットヴァチンターマニディーデイトイ』に対する直接の註釈ではないけれどもラグナータの思想を理解するために非常に役に立つ。なぜなら、*Vāmacarāna Bhattacharya* は現代の註釈者であり、他学派との論争の必要がなく、シヤガディーシヤとラグナータの思想をわかりやすく註釈しているからである。和田氏はおそらく、この *Vāmacarāna Bhattacharya* の註釈を主に参照しながら解説研究を進められたのだと推察できる。

ガンゲーシヤは『タットヴァチンターマニ』「暫定的定義」(*Purvapakṣa*) 章において、二二種類の遍充定義をひとつひとつ

つを批判し、「究極的定義」章において、第二二番目の定義を究極的定義として認める。それは和田氏の解釈によると次のようになる。

pratyogya samānādhikarāṇya tatsamānādhikarāṇātyantābhāvapratyogitāvachchedakāvachchinnaṃ yan na bhavati tena samāṇ tasya samānādhikarāṇyaṃ vyāptih. 遍充 (vyāpti) とは、 $x$  (能証)  $\rightarrow$  反存在 (pratyogin) と同じ基体を持たずに  $x$  と同じ基体を持つ恒常無 (atyantābhāva) の反存在性 (pratyogita) の制限者 (avachchedaka) によって限定されたもの (反存在)  $\rightarrow$   $x$  (所証) との共存関係 (samānādhikarāṇya) である。

わかりやすく言えば、遍充とは、能証 (sādhana, hetu) と所証 (sādhyā) とが同じ基体 (adhikarāna) を持つことである。そして、その所証は恒常無に対する反存在性を制限する者に限定されてはならない。さらに、その恒常無は反存在と同じ基体を持つてはならないのである。具体的に「台所は、火を持つ。煙のゆえに」という推論の例で示せば、「台所」は基体 (adhikarāna) であり、「火」は煙を遍充するもの (vyāpaka, 能遍) であり、「煙」は火に遍充されるもの (vyāpya, 所遍) である。そして、証明されるものである火と、火を証明する煙とは、たとえば、台所という同じ場所に存在しなければならぬ。そして、その火は台所に存在しないもの (牛) の非存在と否定関係にあるもの (牛の存在) を制限する者 (牛性) に限定されてはならない。恒常無 (atyantābhāva) とは非存在そのものこと

である。ここでは、台所にある恒常無とは台所に存在しない何かを指すのではない。台所に存在する非存在そのものを指すのである。そして、その反存在 (pratyogin) とは非存在と否定関係にあるもの、すなわち存在のことを指している。以上が、ガンゲーシヤの究極的定義である。複雑なガンゲーシヤの定義を理解するには、和田氏が示されている図 (本書 pp. 129 f., Figure 25, 26) が非常に役に立つのである。このように、新論理学での遍充定義は古典論理学のもの比べて飛躍的な発展が見られる。しかし、ラグナータはこのガンゲーシヤの定義には満足せずに、『タットヴァチンターマニデーディ』においてさらに厳密な考察を展開する。ここで、その内容を紹介することは、不可能なので、ガンゲーシヤには見られないラグナータの独自性について一例だけ触れてこの書評を締めくくるところにする。ガンゲーシヤの定義では、「共存関係」(samana-dhikaranyā) という語が用いられていたが、その代わりにラグナータは「関係性」(sambandhiva) という表現を用いる。同様に、「基体」(adhikarana) という語に対して、「関係を持つもの」(sambandhin) という表現を用いる。ガンゲーシヤの定義では、存在性定立関係 (vritinyamakāsambandha) の場合、遍充関係が成立するが、存在性不定立関係 (vrittyanyāmaka-sambandha) の場合、遍充関係は成立しない。例えば、「あの山に火がある。煙のゆえに」、もしくは「あの山は火を持つ。煙のゆえに」という場合、「あの山」に「火」と「煙」は存在する。この場合、「あの山」と「火・煙」との関係は、存在

性定立関係であり、「あの山」を基体 (adhikarana) と考えても遍充関係は成立する。しかし、正しい推理である「あの山は火の所有者である。煙の所有者であるから」という場合、主題を基体と考えると、主題である「あの山」に能証である「煙の所有者」と所証である「火の所有者」とは存在しない。この場合、主題と能証・所証との関係は、存在性不定立関係である。

しかし、「あの山」を「関係を持つもの」(sambandhin) と考えると、「あの山」は、「火の所有者・煙の所有者」を同一関係 (tadātmya) によって持つことになる。ラグナータは、この同一関係を存在性不定立関係と考える。したがって、主題を「基体」と考えると、主題と能証・所証との関係が存在性不定立関係にある場合、正しい推理にもかかわらず、遍充関係が成立しないが、主題を「関係を持つもの」と考えると、遍充関係は成立するのである。この議論については、本書 pp. 147-151 の詳細な解説と p. 152 の図 (Figure 33) を参照された。

最後に、序論において Prof. V. N. Jha が述べているように本書は Ingalls, D. H. H., *Materials for the Study of Navya-nyāya Logic* (Cambridge, Mass., 1951), Matilal, B. K., *The Navya-nyāya Doctrine of Negation* (Cambridge, Mass., 1968) などの研究方法を引き継いだものである。すなわち、サンスクリット語で書かれた新論理学文献をサンスクリット語以外の現代語である英語で訳出、解説したものである。それ以上に、図の導入により本書は、和田氏の優れた哲学的解釈に支えられた

本格的な新論理学の研究書であると同時に、インド哲学研究者のみならず、哲学研究者一般に対してインド新論理学の扉を開く、価値ある一冊となっている。新論理学の研究者はその重要性に比して世界的にも少なく、日本でも最も研究者が少ない分野のひとつと言えらる。しかし、和田氏の研究によってラグナータの遍充 (Vyapti) の全容が明らかになり、新論理学の研究がさらに進むものと思われる。

以上、本書を評すると言うよりも、ガンゲーシャとラグナータとの遍充概念の一端を本書を通して垣間みただけであるが、

この場をきっかけとして本書を実際に手に取って、新論理学の遍充概念の構造を理解される読者がひとりでも増えることを願うと同時に、本書に続く和田氏の新たな研究を大いに期待したいものである。

Toshihiro Wada, *Invariable Concurrence in Nyaya-*

*nyāya*. Delhi: Sri Satguru Publications, 1990.

英文総数一二五三三ページ。文献目録、索引付。

定価 Rs. 380.